「ハナミズキのみち」の祈り
　～みんなみんな大切な命～

２０２２年5月１２日
５０歳代　淺沼ミキ子さん
岩手県陸前高田市

聞き手　千葉直美

晴れ渡った朝であった。海が遠くに見える。民宿に昨夜泊まって迎えた朝。昨日から私は緊張していた。絵本「ハナミズキのみち」を数年前に読んでいらい、作者の淺沼ミキ子さんに会ってみたいとずっと思っていた。幸運にも連絡がとれ、見ず知らずの私に会ってくださることになった。わざわざ、民宿に迎えにきてくだるという。海を背景に玄関に現れた明るい笑顔。その瞬間から、なにか初めて会うような気がしない不思議なものを感じた。

淺沼さんは東日本大震災で２５才の息子さんを亡くした。ある日、息子さんの声が聞こえた。災害時に目印になってみんなが避難できるようにハナミズキを植えてほしいと。淺沼さんは、仲間と共に赤と白のハナミズキを海から山へ向かう一本道シンボルロードの両側に２０１９年から植え続けている。ハナミズキを辿っていけば迷わず避難でき、将来の命を守り、悲しみや苦しみを経験する人が二度とないようにとの祈りをこめた。

車に乗って海に近い道へと降りながらお話をしてくださった。あの日のままの建物がまだ少し残っている。

「防災教育の中で、小学校に招かれ、あの日のことを話す機会があるのですが、子供たちに恐怖を与えてしまうことがわかりました。怖くなって保健室に行ってしまう子供もいます。震災後に生まれた子供たちにとって陸前高田の町は、震災後に整備された姿しかわかりません。過去に大きな地震と津波があって、町ごと全部なくなったことは想像できないのです。でも、あの時、何があったかのかをどう伝えたらいいのか・・・」

かさ上げされた新しい道の横に、当時の海抜０メートルにあった道が下に見える。車を降りると、海風が強く肌寒い。

「息子は市の臨時職員でした。マニュアル通りに、避難所へ逃げてくる住民に対応するため息子は車で向かいました。私は、その避難所で息子に会って無事を確認しています。私はそのまま自宅へ山道を通って帰りました。堤防もあるし、まさかここまで津波がこないと思っ

た人が多いでしょうね。避難所で犠牲になった人が多くいます。息子も、その一人です。

また車に乗り、ハナミズキのシンボルロードに向かった。その道は想像していたより長く幅もある。

「今では１００本を超えましたよ。未来の命を守るために自分事として震災を、たくさんの人に伝えてほしいです。私にとっては悲しみをぶつけるシンボルロード。悔しさは消えません。息子を亡くしてから毎日泣いていました。このままじゃだめだと思っていました。そしてこの道にハナミズキを植え始めました。」

５月初旬の陸前高田。満開は過ぎたけれど、まだ花が少し美しく咲いていた。絵本を読んでからいつか訪れたいと願っていた道に、こうして作者と立っていることで胸がいっぱいになった。犠牲になった息子が母親に託した願いをかみしめる。

「義理の母が私に言ったのです。『なんで健（たける：息子さんの名前）を置いてきた？』。ずっと心に刺さっています。家では私は、亡くなった長男の話はしません。私には次男と娘がいます。私は今は、次男家族と同居していて、嫁いだ娘は時々、帰ってきます。私にとって長男だけが子どもじゃありません。孫もでき、新しい命も産まれてきています。家では、長男について言葉を飲み込みます。５年か６年か７年かかったかなぁ。幸せを感じるようになったのは。最近は、幸せだなぁと感じます。長男だって泣いてばかりいる母は好きじゃないと思うし。今は、８人暮らし。孫の保育園の送り迎えをし毎日家族の料理を作っています。お料理だけが自分ができる愛情表現。旬の食材を見つけてきて工夫します。家族を大事にしたい。みんなみんな大切な命、いとおしい。生かされていることに感謝です。」

陸前高田の駅まで送ってくださった。眼下に、震災の姿をそのまま残す個人所有の建物があり、ウクライナの旗が風に強くはためいていた。鳥が舞っていた。

参考文献：
「ハナミズキのみち」
淺沼ミキ子 文／黒井 健 絵、金の星社（２０１３年5月３１日）
「ハナミズキの願い」非売品
淺沼ミキ子 文／黒井 健 絵、一般財団法人日本出版クラブ（２０１３年１０月２０日）

浅沼ミキ子さん

ハナミズキ
の
みち
文・淺沼ミキ子
絵・黒井健